市長メッセージ ▲66

この一年を振り返って

熱海市長　齊藤　栄

本年も残すところあとわずかとなりました。「新生（リニューアル）熱海」を掲げた初年度である今年、私にとっていくつか印象的なことがありました。

ひとつは「市庁舎」「熱海駅前広場」「新生熱海中学校」の大型建設プロジェクトが着実に進展していることです。中でも特に市庁舎と中学校の整備は市長就任以来の大きな懸案事項でした。どちらも就任当時の財政事情から着手は難しい状況にありましたが、市庁舎についてはシステム建築工法の活用により建設費用を大幅に抑え、中学校の耐震化については熱海中と小嵐中の統合を決定し、それぞれ建設着手となりました。

もうひとつは「新・敬老大会」の開催です。敬老大会は平成19年度を最後に中止していましたが、私はこれまで熱海の発展に貢献された皆様に感謝の気持ちを表すこの事業は、ぜひ復活させたいという強い思いがありました。内容も一新し、参加者の皆様がより楽しんでいただけるよう工夫を凝らし、おかげさまでアンケート調査によれば参加者の約9割の方に「楽しかった」と答えていただきました。

行財政改革プランを実施した5年間、市民そして業界の皆様には多くのご負担をおかけしましたが、熱海市は既に新しい段階に入っています。「熱海は新しく生まれ変わったね」と市内外の方々から言われるよう、「新生（リニューアル）熱海」の取り組みを来年以降もさらに強力に進めてまいります。

広報あたみ2012．12月号掲載

市長メッセージ ▲65

マリンスパあたみ

熱海市長　齊藤　栄

「マリンスパあたみ」を利用したことがありますか？「賑わいの創出」と「市民の健康増進」を目的に平成12年にオープンした温水利用型健康運動施設です。海と街並みを望む絶景のロケーションで、総事業費は25億円。私も運動不足解消のため週に1回程度通っています。

今、このマリンスパあたみの運営が大きな課題になっています。オープン時の年間利用者目標23万人に対し約18万人が過去最高です。昨年度は震災の影響もあり約14万人にまで落ち込んでいます。施設の抱える年間の赤字は、市と民間事業者で合わせて約7千万円にも上り、市民の皆様が健康増進のため引き続き利用いただくためには大幅な経営改善が必要です。施設の運営は指定管理者制度を活用し、平成20年度から民間事業者が行っています。経費の圧縮や水泳大会の誘致などさまざまな経営努力を行っていますが、経営状況の大幅な改善には至っていません。

先日、マリンスパあたみの次の指定管理事業者募集に向けた説明会を行いました。マリンスパあたみは夏の3カ月で年間の過半数の利用を占めています。これはプールとしての利用が中心である一方、温浴施設が秋・冬期にあまり使われていないことの表れでもあり、改善の余地があると考えています。例えば温浴施設をリニューアルし、夏以外の利用者を増やすことも改善方法の1つです。熱海の未来に対する投資を含んだ提案をしてもらい、市と力を合わせて良い方向に進んで行くことを強く期待しています。

広報あたみ2012．11月号掲載

市長メッセージ▲64

新・敬老大会

熱海市長　齊藤　栄

10月上旬に5年ぶりに敬老大会を開催しました。敬老大会は敬老祝い金など、ほかの敬老事業とともに平成19年まで実施されてきましたが、行財政改革の一環で中止していました。市の財政状況が一定の改善をしてきた中、多年にわたり熱海の発展に寄与された高齢者の皆様に感謝の意を表すこの行事については、例外的に復活させたいとの考えから再開の運びとなりました。

再開にあたっては実行委員会を設けて、より充実した敬老大会にするために、色々と知恵を絞りました。従来の温泉入浴や各種演芸などを会場で楽しんでもらうにとどまらず、『若さと健康をご自宅までお持ち帰りいただく』をコンセプトにプログラムを組みました。具体的には、「マッサージ教室」で自分でできるツボ療法の講習会を開催したり、「美容メイク教室」で若々しさを保つための体験レッスンを受けられるようにしました。

ほかにも、リサイクル活動など社会貢献を積極的に続けている団体の発表ブースを設けたり、ジャズの生演奏や、「銀座カンカン娘」の映画鑑賞などで時代を共有していただくなど、これまでと趣向を変えています。また、今回初めて参加にあたって費用負担もいただきますが、これは昼食をお渡しするにあたり、参加したくても会場に来ることができない方との不公平感をなくすためです。

5年ぶりの敬老大会。熱海を支えてきた多くの皆様方から「良かった、楽しかった」と感じてもらうことができていれば幸いです。

広報あたみ2012．10月号掲載

市長メッセージ▲63

市長室の移転

熱海市長　齊藤　栄

8月上旬に文化会館の耐震補強工事が完成し、第三庁舎として市長室を仮移転しました。第三庁舎は御用邸跡という由緒正しい場所です。御用邸は明治21年（諸説あり）の建設で、当時を偲ぶものは今となっては写真のみとなっていますが、現在の市役所の敷地には実に多くの歴史が刻まれています。

今回の仮移転で、市長室から見える景色は大きく変わりました。これまでは本館の6階から熱海港と初島を望むことができましたが、今は1階の高さから中庭の駐車場と、老朽化した本館の裏側が見えるだけです。現在の市庁舎は、戦後の熱海大火で消失した後の昭和28年に竣工し、今年で築59年。ご存知のように大変老朽化しています。改めてその外壁を眺めていると「ここまで本当によく頑張って熱海市政を支えてくれたなあ」との思いを強くします。

一連の市庁舎整備は平成26年度当初の完成予定です。整備は財政上の制約から分庁化という方式を採用しました。文化会館など耐震補強の可能な建物は補強して引き続き活用し、どうしても補強に耐えない建物のみ、新たに建て替えるというものです。新たな市議会議場は文化会館内の旧図書館の閲覧室を改修したもの、その傍聴席の座席は旧観光会館の座席を再利用したものといったように色々と工夫して建設費用をできるだけ抑える努力をしています。再来年の完成に向けて遅延が無いようしっかりと進めていきます。

広報あたみ2012．9月号掲載

市長メッセージ▲62

ポルトガルを訪問

熱海市長　齊藤　栄

6月の下旬、私は初めてポルトガルを訪れました。熱海市と姉妹都市提携を結ぶカスカイス市が主催する国際会議に出席するためです。市民訪問団も含め総勢21人で向かいました。

1543年、種子島の鉄砲伝来。昔、学校で習った記憶がありませんか？日本人が最初に出会ったヨーロッパ人がポルトガル人です。以来、日本とは長いお付き合いのある国です。ちなみに日本人が今日使っている、パン、シャボン、カステラ、そして天ぷらもポルトガル語が語源だそうです。国民性は時間を気にせず大変のんびりした印象でしたが、街のいたるところで、巨大な建造物に象徴される16世紀の大航海時代の威光を感じました。

今回の訪問での大きな成果の一つは、これから約2年かけて海岸沿いのお宮緑地に大規模に整備する予定のジャカランダの故郷を訪れたことです。ジャカランダは中南米原産で、薄紫色の美しい花を咲かせる花木ですが、22年前にカスカイス市との友好の印として熱海に植えられました。

幸運なことに、調印の際、熱海を訪れたカスカイス元市長のダルジャン氏に会議の会場で会うことができました。当時のことを大変良く記憶されていて、「ジャカランダのプロムナードが完成したら、ぜひ、また熱海を訪れたい」と言われました。

滞在は1週間と短いものでしたが、日本とポルトガル、そして熱海市とカスカイス市の歴史とつながりを感じた旅となりました。

広報あたみ2012．8月号掲載

市長メッセージ ▲61

最近うれしかったこと

熱海市長　齊藤　栄

最近、うれしかったことがありました。「伊豆山を面白くする実行委員会」の総会に来賓として出席した際のことでした。その会の一人のメンバーが私に、ぜひ提案したいことがあるというのです。その内容はこうでした。「自分たちは、市の助成金制度に手を挙げ、伊豆山に市民の目線からの観光看板を新たに設置したが、それが期待に応えるものだったかどうかの評価が欲しかった。また、一緒に審査を受け、合格した他の団体と横の連携を取り、お互いの事業の良い点などを学びたかった。」というものです。

その事業は「観光まちづくり事業費補助金事業」という名で、地域の自主的なまちづくり活動を市が助成するものです。私は、単に市から補助金を得られればいいという発想ではなく、地域にとって助成をいかに実りのあるものにするかを考え、かつ本気で取り組んでいるその姿勢に感銘を受けました。

一方、この提案を後日文書で受け取った担当職員の対応も的確なもので、「市として事業実施後の検証を徹底し、参加団体相互の交流を促すなど、この補助事業が市民の皆様にさらに有効に活用していただけるよう改善を図ってまいります。」との回答を返しています。

まちづくりに取り組む市民の皆様、そして市役所職員の意識は、ここ数年で確実に変わってきた気がします。今後もこのような地域主体の「観光まちづくり」の取り組みが進んでいくことを期待します。

広報あたみ2012．7月号掲載

市長メッセージ ▲60

熱海の黄金期

熱海市長　齊藤　栄

「熱海の黄金期」はいつだと思いますか？

私は熱海が最も輝いていたのは、明治の中ごろから大正にかけてだと考えています。

このころ、熱海は東京の奥座敷として政財界の要人などが保養地として訪れていました。私はこの黄金期を象徴するシンボルとして①熱海御用邸②喰潮館③梅園があげられると思います。

御用邸はいうまでもなく天皇家が保養をされる場所であり、熱海（現在耐震補強中の文化会館の辺り）にかつて御用邸があったということは誇らしいことです。

喰潮館は日本で最初の温泉蒸気を活用した療養施設です。ドイツから器材を取り寄せ、当時最新式の設備を備えていました。療養所は完成したが、そこでゴロゴロしていては回復が進まない、運動のために野山を歩くべしと、梅の木など数千本を植栽して整備したのが梅園です。現代でいえばサナトリウムと森林浴であり、喰潮館と梅園の先進性と科学性はまさに時代の最先端でした。

その後、昭和9年の丹那トンネルの開通により、保養地として発展してきた熱海の「観光地化」と「大衆化」が進みます。昭和40年代前半にはそのピークを迎え、熱海は一世を風靡しますが、同時に失ったものもあります。保養地としての高いブランド、街の落ち着きや景観などです。

熱海には開国後の日本が歩んだ足跡がきら星のごとくあり、日本の近代史そのものです。熱海が発展してきた歴史をしっかりと踏まえた上で、「新生（リニューアル）熱海」を創ってゆきます。

広報あたみ2012．6月号掲載

市長メッセージ ▲59

電気料金の値上げ

熱海市長　齊藤　栄

今年の3月1日、東京電力沼津支店へ「電気料金の値上げ回避」の要望書を提出しました。昨年の計画停電により、観光業を主力産業とする伊豆半島は甚大な影響を受けましたが、その後ようやく宿泊数が回復しようとしているところに平均17％の電気料金の値上げが強行されることは、地域経済に取り返しのつかない打撃を与えるものと考えたからです。私から静岡県東部市長会会長の下田市長に提案し、東京電力管内の20の首長の賛同を得てこの行動に至ったものです。

4月3日に東京電力沼津支店長がその回答を熱海市役所まで説明に来ましたが、その内容は期待からは大きくはずれるものでした。電気の使用方法を工夫することで負担軽減につながる新メニューを提示されましたが、これは主として製造業などを対象としたメニューであり、観光業を中心とする我々の実情を考えていないものでした。「地域経済の実態に合わない回答で大変遺憾。もっと観光業界の苦悩を理解されたい。」と伝えました。

また、熱海市庁舎では昨年の夏、7月から9月上旬にかけて原則正午から午後3時まで冷房を切り、34％の節電を行っています。「市民の節電努力の見返りが電気料金の値上げでは、市民感情としても理解しかねる。」と強く訴えました。

電気料金の値上げは、観光業界そして市民生活に大きな影響を及ぼします。東京電力がさらなる経営の合理化とともに情報開示そして説明責任をしっかりと果たすよう、今後とも働きかけてまいります。

広報あたみ2012．5月号掲載

市長メッセージ▲58

新年度を迎えて

熱海市長　齊藤　栄

新年度がスタートしました。平成24年度を迎えるにあたって私には特別な思いがあります。平成18年の9月に市長に就任し、「財政危機宣言」を発し、「5年で財政を立て直します」とした取り組みが23年度でその5年目を迎えたからです。

この5年間で、約41億円あった上下水道温泉事業の赤字を6割削減し、市の貯金である基金を新たに16億円積み増しました。この基金を活用することで、市庁舎、熱海駅前広場、新熱海中学校などの大型建設プロジェクトへの着手を可能にすることができました。この間、市民の皆様には大きなご負担をおかけしましたが、「やっとここまで来た」というのが、私の今の率直な感想です。

これからは「新生（リニューアル）熱海」を目指します。すでに熱海梅園を約120年ぶりにリニューアルしましたが、今後、市庁舎、熱海駅舎がそれぞれ約60年、90年ぶりに新しくなります。同時に、市も「営業する市役所」として、熱海市への民間投資を積極的に呼び込み、地域経済の活性化を図っていきます。

先日、利活用を公募している東海岸町のガソリンスタンド跡地（市有地）で現地説明会を行いました。私は参加企業の担当者に、この土地が夏は大勢の海水浴客で賑わい、目の前で年間12回の海上花火大会が開催され、これからジャカランダの並木が整備され、さらにその価値を高めていくことを強くアピールしました。「新生熱海」を掲げ、今後、熱海市役所も大きく変わっていきます。

広報あたみ2012．4月号掲載

市長メッセージ▲57

子どもの頃のこと

熱海市長　齊藤　栄

幼少期、特に小学校低学年までの自分は、3月生まれということもあり体が小さく、そして性格も大変引っ込み思案でした。体も弱く、徒競走ではビリばかり。人前で話をすることなど考えたこともありませんでした。

しかし学年が上がるにつれ、少しずつ体も丈夫に、性格も明るくなっていきました。小学校時代、得意な科目は理科、図工、家庭科。マンガを描いたり、ドッチボールをしたりして、のんびり自由に育ちました。

大きな転機は中学3年で起こりました。一年間で身長が10センチ以上伸びたのです。それもほとんど夏休みのうちに。友達からは「竹の子」と呼ばれました。私は生まれた時に母乳とミルクをたくさん飲んでいたそうです。このことが効いて現在の188センチにまでなったのかもしれません。ちなみに現在もほぼ毎日牛乳を飲んでいます。性格も次第に積極的になり、学校行事や学級会などに前向きに取り組み、クラスをリードするようになっていきました。

私の父は鰻屋の板前をしていました。母は専業主婦、そして妹が二人います。父は仕事一筋の職人でした。月に1回ぐらいの休みしかなく、子どもの頃、一緒に遊んだ記憶があまりありません。母からはいつも「自分のことは自分で考えなさい」と言われて育ちました。今思えば、おかげで自分の中に自主性のようなものが育ったのかもしれません。両親の私の育て方に、今になって感謝しています。

広報あたみ2012．3月号掲載

市長メッセージ▲56

カンボジア熱海さくら学校

熱海市長　齊藤　栄

昨年末、初めてカンボジアを訪れました。「熱海さくら学校」の贈呈式に参加するためです。「熱海さくら学校」は、熱海国際交流協会が中心となり、平成16年からその建設のための募金活動が行われてきました。そして約600万円の寄付が集まり建設着工し、このたび完成の運びとなったものです。式の当日は早朝にホテルを出発し、学校のある町メーボンに向かいました。

贈呈式はとても感動的なものでした。「これからこの学校で勉強するんだ」という希望にあふれた子どもたちの顔が何より印象的でした。カンボジアは1970年代以降の内戦により学校が十分整備されていません。式には子どもたちのみならず、政府関係者や地元の住民がたくさん集まっていました。テープカット、記念植樹、そして子どもたちに文具などを手渡しました。

私はスピーチの中で、「どうか忘れないでください。皆さんには皆さんの夢を応援している日本人がいることを。熱海という名の町で4万人の市民が応援していることを。そして将来、皆さんが自分の夢を実現して熱海を訪れてくれることを期待しています。」と伝えました。

「熱海さくら学校」の建設は熱海の歴史の中で過去最大の国際貢献といえます。しかも、市民発意の本当に価値ある偉業だと思います。多くの困難を乗り越え、この事業を実現させたすべての関係者の皆様、そして寄付をされた皆様に心から感謝を申し上げます。

広報あたみ2012．2月号掲載